

13. 大正期の七重、中興部

義 達 嘉 平 〃 勝 市

※嘉平＝明治33年3月15日生。
勝市＝明治35年8月20日生。
この稿は、二人の話を総合したものである。

義達家では、次兄の高蔵が先に北海道に渡り、一ノ橋の石丸滝蔵の駅通で、通送夫をしていた。

その後、長兄貞太郎が、日露戦争が終って、明治39年に一ノ橋に入地した。

次兄高蔵が通送しているころ、西興部の区域に当る処では、中興部の駅通（当時の管理人は坂本国命）までの間に、小林四郎左衛門の店が1軒あるだけで、あとは1軒の家もなかったと、よく話を聞かされた。

※これは、明治38年春ころのことであろう。

大正3年に、一ノ橋から七重（瀬戸牛）に移住したが、川勝庄太郎、森美治が、三浦さん附近で店を開いており、後に川勝の跡を小林通が引継いで店をやった。

そのころは、今の旧市街に、これらの家が5、6軒あるだけで、そのほかには、忍路子の入口を（現在の線路を渡り、興部川との三角地帯）国道が通っており、その周辺で、出口善兵衛が飲食店を、出口の兄が宿屋をして、その跡を後に、安部時平さんが引き受けた。

そのほか、宮本という人の料理屋があり、鍛冶屋（衣川金次郎）もあって、馬追いに、安保、北条などがおり、小さな部落が作られていた。

鉄道開通前、大正七年ころと思うが、澱粉工場を中田真吉さんと共同で、義達本家の興部川ぶちで4、5年操業した。

私（嘉平）が中興部に来たのは、鉄道開通の前年（大正9年）で、開通と同時に、運送店の支店ということで、兄政太郎が経営したので、私はその下で働いた。

菊地儀美さんが居た近くに、店（小野左之吉）が1軒あったし、開通当時の駅前には、中上常吉がタバコ、雑貨を、出口善兵衛が飲食店をやり、中川丈平が雑貨商、兄盛平の店や、志賀さんの老人夫婦（彦太郎）が豆腐屋を開いていた。今の神社附近で佐々木という蹄鉄屋も居たと思う。

中興部の開拓は、私は農家でないのでよく分らないが、明治時代に、山口元蔵、関口文雄等が入地している。

ペンケ沢も、年代も順序もはっきりしないが、浜高、靱山、三浦、奥田喜平、片山、金山、才川喜太郎、千葉などが居た。根本忠助、田中（沢に、この人らの名がつけられている）らは、この後だと思う。

塩田兵吉さんの親が、奥の方を早く開いたと聞いているが、今は1戸残らず離農して、熊の巣になってしまった。

（嘉平氏夫人談）昭和の初めころ、村の中でも随分水田が作られたが、中興部でも、関口さんが、今の長尾さん（駅のうら）の居る附近一帯を水田にしていました。始めたのは、昭和になってからだと思います。関口さんは、物を永く保存することで有名な人で、戦時中、配給がきびしくなってから、貯蔵してあった粳を何俵か買って食べましたが、あまりおいしい米ではありませんでした。